

「五秒に一人」私が偶然耳にしたその言葉は、五歳の誕生日を迎えられずに消えゆく小さな命のことだった。私たちが今こうしてテレビを見たり、お風呂に入ったりしている間に何人もの小さな子どもが命を落としているなんて信じられなかった。

私は図書館で一冊の本と出会った。黒柳徹子さんの『トットちゃんたちとトットちゃんたち』何気なく手に取ったその本が自分自身の将来を見つめるきっかけになるなんてこの時は思いもしなかった。

二〇〇一年に訪れたアフガニスタン、タリバンや内戦によりたくさんの女性が夫を亡くしていた。そして何より、女性の権利が認められていなかった。私と同じくらいの女の子はオシャレをすることも、勉強することも、誰かを好きになることもできなかった。私にとっての当たり前は彼女たちにとって夢のようなことであった。そんな状況の中でも、彼女たちは見つからないようにひそひそと勉強をしていた。大人たちがお金を出し合い女の子たちに教育をさせていたのだ。才能のある女性が自由を奪われて、家庭に閉じ込められてきたのを見てきた女の子たちの強い思いは私だけでなく多くの人の心にも響くだろう。タリバンや内戦など大人たちの理不尽な行動に苦しみながらも一生懸命に生きる子供たちの笑顔は私の心を強くしめつけた。

いつ死んでしまってもおかしくない状況の中で、どうして貧しい子供たちは勉強をしているのか、同じ世界でこんなにも違う原因は何か考えた時、根本は教育であるのではと気づいた。人を簡単に殺したり、物のように扱ったり、それはそんな大人たちが教育を受けてこられなかったからではないか。だから今の環境を整えると共に、子どもたちにはしっかりとした教育を、未来のために先進国が利害にとらわれることなく支援していく必要がある。

では私には何ができるのだろうか。今の自分の力では子ども達を直接助けることは難しい。だが、これからも自分だけが幸せな生活を送るなんて本当に良いのだろうか。知ったからこそ、何かできることがあるはずだ。助けることはできなくても心の支えになってあげたい。私は発展途上国の子どもに手紙を書くことにした。バングラデシュに住む女の子のパートナーとなり支援をしながら文通をしている。いつか、実際に発展途上国に行き、今度は自分の目で見て、自分の手で一人でも多くの子供たちが幸せになれるお手伝いがしたい。私が手紙を送ることで、自分の世界がもっと広がり、向こうの子どもたちも私の手紙を通して世界が広がってくれたら嬉しい。私たちはみんな地球という大きな船の一員なのだから。